

明月千里
イラスト

omaera doredake
orenokoto suki dattandayo!

OMA-DORE!

お前ら
どれだけ俺のこと

好き!
だったんだよ!

試読版 乃愛編

第六節 櫛水乃愛は恋煩いをする

『バイトがない日にこんなことを頼んで悪いんだが、うちの娘を見舞いに来てくれないか？』

ある日のこと——厳密に言えば、りゅうと隆人が生徒会長からフラれて第二天文部へと入部した翌週の水曜。

隆人が半年前から週三で働いているバイト先の喫茶店きつさてん、『キャットオブナインテイル』のマスターから、そんなラインメッセージが唐突とうとつに入ってきた。
娘とは、隆人の同級生である、くしみずのあ櫛水乃愛のことを言っ

ているのだろう。

プログラマーの天才少女で、病的なまでの人見知り。
協調性ゼロの擬人化^{ぎじんか}。

無口で虚弱なくせに、主張が強く、唯我独尊^{ゆいがどくそん}のスタイルを貫いている変人である。

厳密に言えば、自分勝手とはちよつと違う。

自分のルールを曲げずに人に押しつけてくるだけで

——やっぱり、自分勝手かもしれない。

隆人とはバイト先の娘という奇妙な縁^{えん}もあり、クラスメイトという点もあり、ちよくちよく関わり合いがある少女である。

入学から半年後の出会いと、とある出来事。

学園内に捨てられていた猫^{ねこ}の飼い主を探した件で協力したことにより、人見知りの彼女にも顔は覚えてもらえた。

その後、彼女の父が経営する喫茶店でバイトの面接に受かり、客の応対をしないという彼女の不足を補うという、なんとも奇妙な友人（？）関係を築いてきた。

しかし——未だ彼女の本心をつかめていないという点に関しては、隆人も他のクラスメイトと同じだろうと思う。

ただひとつ——乃愛は自分本位な少女であるが、悪いヤツではない。

対人の交渉が死ぬほど苦手なくせに、わざわざ特設サ

イトを作ってまで、猫の飼い主を捜してやったのを見て、
隆人は確信した。

マスターからは、なんとか乃愛が周囲に打ち解けられるようにしてほしいとお願いされ、それを乃愛に伝えたところ――。

『死ぬほど余計なお世話だから、しなくていい』

即座にジト目で睨にらまれてしまった。

『そんなことしたら、隆人の携帯にウイルスを送って恥ずかしいエロサイトの閲覧履歴りれきを全校生徒の携帯に拡散するから』

『やめてくださいお願いします。僕が悪かったです』
気遣いがバレた直後、メールでそんなやりとりをした

覚えがある。

（というか何故^{なぜ}、俺^{おれ}が携帯でエロサイトを見ているという前提で話をするッ!?）

激しく異を唱えたかったが、その後の返答が恐ろしいのでやめた。

それはさておき、乃愛の身勝手な生き方^{あき}に関しては呆れる反面、隆人は羨まし^{うらや}いと思うこともあるのだ。

クラス内で唯一、教室に『枕^{まくら}』を持参しており、休み時間は全力で寝ている。

昼休みも……寝ている。

授業中も……真面目に聞いているフリをしつつ、目を開けたまま半分寝ている。

おそらくだが、電車でも立ったまま寝られるに違いない。

いつか一度実験してみたいと隆人は思っている。

なお、乃愛が他の生徒と会話したところを、ひと月の間でたった二度しか隆人は見たことがない。

それも、一言二言で終わるレベルの素^そっ気^けない内容である。

女子の連れトイレに行かないだとか、ぼっち飯だとかいう次元ではない。

もはや人間関係の拒絶どころか、同じ世界線に存在しているかも怪しいものである。

そんな乃愛が病気で倒れたというのは、若干^{じやっかん}心配でも

あつた。

もとより体も強い方ではないようだが、それでも負けず嫌いでしぶとくやってくるのが乃愛という少女なので、一週間も休んでいるのは気になつていた。

「見舞いになにを買っていくか。みよう妙な下心を出すと嫌われそうだしな、アイツの場合」

ちなみに、『オシヤレ』とか、『インスタ映え』とかいう一般的な女子の感性とは無縁むえんな乃愛だが、あれで容姿は結構——いや、かなり可愛かわいいのである。

ノーマイクだがきちつと制服を着込んでいるだけで、既に美少女なのだ。

なお、友人すらいな有様なので、白雪以上に浮いた

話はない。

そんな乃愛だが、隆人も全くの他人ではない以上、今回は会いに行ってもいいと思った。

お見舞いの品といえ^{くだもの}ば花か果物だろうが、乃愛が相手の場合は『センスがない』とか『部屋の邪魔』だとか言われそうな気がしてならない。

「いや——俺にそれだけ言うくらいの元気があれば、よかったことにするか」

変人で、かろうじて友人と呼べるくらいの関係で、半分以上は話も通じないが——これで結構、乃愛のことは好きなのである。

そんな自分もまた、かなりの変わり者だと思いながら

——病人でも食べやすそうなものを選んで差し入れてやることにした。



放課後から十数分後。

隆人は制服姿のままバイト先のカフェに到着する。

二階建ての広めの一軒家^{いっけんや}で、一階は喫茶店。二階は物

置兼マスターの部屋らしい。

それでは乃愛の部屋はどこかというところ——地下室である。

母親はいないそうなので、まずはマスターに軽く挨拶^{あいさつ}

し、乃愛の部屋の合い鍵を渡される。

「いや、よく来てくれた。嬉しいよ芦宮君。^{うれ}乃愛の病状はまるでわからんが、ゆっくりしてくれたまえ」

「いいんですか？　よそ者の男に合い鍵を渡して」
ひげの似合う紳士的なおじさんで、俺は信賴を寄せているが、人が良過ぎて不安になることがたまにある。

ちなみにコーヒーの味はなかなかだが、根本的に商売下手^{べた}なのか、採算ギリギリでやっていけると聞いた。

乃愛が中学生時代に作ったアプリやソフトで稼ぎ、たいそう儲^{もう}けたおかげで金には困っていないそうだが——なんと複雑な家庭事情である。

ちなみに全部マスターから聞いた話だが、バイト如^{ごと}き

に情報漏らし過ぎだと思う。

「つていうか、まだわからないんですか？ 病院にはもう行っただすよね？」

「昔から医者嫌いな子だが、部屋の前で土下座し続けて行ってもらったよ。ははは」

マスターは苦笑しながらとんでもないことを言う。

（完全に、立場が逆転している……！）

そんな乃愛にウェイトレスをやらせたこと自体、ある意味奇跡的なのではなかろうか。

本人はものすごくやる気がないが。

「いろいろ検査をしたんだがね。わからなかった。先週からみるみるうちに元気がなくなっってしまったね。悪い

が、相手をしてやってくれると嬉しいよ。あの子は、君だけには心を開いてるようだから」

「あんまり期待しないでください。善処ぜんしよはしますけど」

内心、『うつそだろ』と突っ込みたかった隆人だが、
素直すなおに頷うなずいておく。

その後、プリント数枚を持って、カウンター裏の秘密の入り口を探る。

なるべく静かに地下への階段を降りると、扉の前でノックした。

「——乃愛、起きてるか？ 死んでないだろうな」

「……………」

返事はない。某RPGであれば死体と判断されてもや

むなしな状況であるが、隆人はめげずにラインでメッセージを送った。

『ピザをお届けにまいりました。ついでに学校のプリンとも』

『ギャグセンスがマイナス二百点。眠い。置いて帰れ』
「くわあ……」

人の心を容赦なくえぐってくる。

大半の人間はこれでショックを受けて去って行くが、乃愛と対話しようと思ったら、この程度でめげてはいけない。

乃愛は言うなれば、気紛れきまぐれな猫の性格を三回転ひねったような存在である。

とまあ、普通ならばこんな可愛くないヤツは知らん！
と思うところだが、この点も乃愛らしい、あまり人に
弱味を見せたくないという強がりであることを隆人は知
っていた。

というわけで、最初から考えた作戦に出た。

『お土産みやげのアイスも置いていつていいか？ 入り口に置
いておくとびちよびちよになつて、扉越しにお前の部屋
に染み込んでいくぞいいのかあ？』

こういう挑発をしてやるのである。

ちなみにメールを打つときは、不敵な笑いを浮かべな
がらやるのがコツである。

『さつさと、持って帰れ』

『嫌ですー。部屋に入れてくれないと置いていきますー』

このメールを打ったあと、返信がやむ。

が、これは乃愛が無視を決め込んだわけではない。

隆人が扉に耳をあてると、もぞもぞと衣きぬ擦れの音がする。

そこから察するに、人と会うための最低限の体裁を整えようとしているのだろう。

つまり、隆人を迎え入れる気になったということなのだ。

『冷蔵庫に入れて、とっとと置いていけ』

カチツとカギが内側からひねられる音がして、許可が

下りる。

「おじやましまーす。うわっ!？」

ドアを開けると、足下に空のペットボトルがトラップとして仕掛けてあつたが、なんとか回避する。

「……ちっ、かわしたか」

ベッドの上で腰を下ろしたまま、小さく舌打ちする音が聞こえた。

どうやら先ほどの準備時間は、これを仕掛けていたらしい。なんてヤツだ。

パジャマを着た濃紺のうこんの黒髪少女——乃愛が、フラット b を横に倒したような半目はんめを向けてきた。

相変わらずの、虚無きよむ的で気怠けだるげな抑揚よくようのない声である

が、主張は大きい。

地下室の中には七色に光るLEDのライトと、無数のPCの廃熱ファンが回る音が聞こえてくる。

地下の秘密研究所のような生活感のない空間には、様々なモノが転がっていた。

「あんな。これが見舞客に対する仕打ちか？ お前は山で遭難したら救急隊に対し^{わな}罠を張っておくのか……？」

開口一番突っ込むが、乃愛はにべもない。

少し妙だと隆人は思う。

^{やまい}病で伏せって一週間ほどもするというのは、ここまで

やる元気が残っていたのだろうか？

（そもそも、そういうことすらめんどくさいと思うだろ

うに)

ただ——食欲がなくなりふらついてるのは事実のようだ。

「ところで、あんまり飯食ってないんだろ？　これでも食っておけ」

と、プリンやアイスなど、食べやすくてカロリーの多いモノを差し出すが。

「いらない。食欲ないし」

乃愛が素っ気なく呟いたその瞬間、キュルル、と。腹の虫が主に叛逆の意を示す。

「……………」

次の瞬間、乃愛はかすかに頬を染めつつ、ジト目で言

い切った。

「今の聞いてたら、ころす」

「純粋な殺害予告をするんじゃない！ そこは『誰かに言ったら』とか、『今すぐ忘れないと』とか、前提をつける！」

聞いたらおしまいだとか、呪い^{のろ}の言葉にもほどがある。いや、腹の音だったか。

「やっぱり聞いてたな？　ころす」

「今の裏付けを取られていた!？」

さっきのセリフに『なんのこと？』って返すのが正解だったのかよ!?　わかるかそんなの！

脳内で叫びつつ、隆人は乃愛の気力が多少は戻ってき

たことを実感した。

「だいたい殺すってな。今のフラフラのお前にやられはしないぞ？」

「大丈夫。隆人の恥ずかしいコラ画像を、永久にネットに拡散して社会的に殺すから」

「やめろ！ そっちの方がむしろ嫌だ！ あと犯罪な！」

真面目にできるくらいの能力はあるから困る。

才能の無駄遣いもいいところだ。

「そしたら、できたばかりの彼女にも、フラれたりして」

にやっ、と。虚無的な乃愛にしては珍しい粘着質な笑

みを見せる。

（まさかコイツ——、俺に彼女ができたことを根に持っていたのか？）

隆人は前回のバイト時に軽くその件を伝えたが、そのときは『あっそう？ ノロケ話を聞かせたらころすよ』くらいの適当さだった気がする。

というか、基本的に他者の事柄に関して無関心な少女なので、わかりづらい。

しかしその反面、隆人が既にフラれたという件も言いやすかった。

「悪いが乃愛、今の俺にその攻撃は効かないぞ」
「……？」

無表情のまま首を傾げるパジャマ姿の少女に、隆人はむしろ開き直って教えてやることにした。



隆人が見舞いにやってくる数時間前、櫛水乃愛は死にかけていた。

乃愛の記憶上、これまでの人生において『風邪^{かぜ}を引いたこと』多数、『インフルエンザ』三回、『ノロウィルス』一回、『骨折』一回。

——と、そのようなカルテを自分のメモ帳につけていた。

因果関係^{いんが}をなるべく突き止め、体調を崩さぬように心がけていたのだ。

三行日記という記録を毎日つけ、安定したパフォーマンスを発揮できよう努力している。

それもこれも——自分の才能によるプログラムの作業に没頭^{ぼつとう}し、己の生き方を貫くためである。

他者から見るとやる気なさげに生きていると思われがちな乃愛だが、実際はかなり真剣に己の人生と向き合っているのだ。

対人アレルギーともスキゾイドとも思われる自分は、人になるべくかかわらず、自立した将来を生きるための努力は欠かさない。

「なんという失態^{しつたい}。このわたしが病気の原因すらつかめないとは……」

しかし、^{よわい} 齢十六歳にして、乃愛は謎の奇病にかかった。三行日記にも、別段おかしいことが起きた兆候^{フラグ}は残っていないかった。

ただ、無気力になり、何事にもやる気が湧いてこない。胸の中心に鈍い痛みが走り、昼夜問わず苦しんだ。

睡眠不足、食欲不振、集中力の欠如^{けつじょ}。

それでも意地で学校には通おうとしたが——とある日を境に全身から力が抜け、立ち上がることもすらできなくなってしまったのだ。

「これはきつと、世にも珍しい奇病に違いない……」

そう思って症状を検索したが、思い当たる節はなかった。

厳密に言えばストレス性の精神疾患しっかんが近いといえたが、心労に心当たりはなかったのでその可能性は捨てた。

ある晩――、乃愛は夢を見た。

たまに見る同じ悪夢ではなく、学園のワンシーンの記憶だ。

一年生の二学期――校舎の裏でこっそりと、捨て猫に餌えづ付けしようとしている女子生徒の先輩せんぱいがいた。

一見すると微笑ほほえましい行為に思えるが――結局のところ、敷地内に居着けば邪魔になり、最終的には保健所行きにされてしまう。

だから、後のことを考えずに餌付けするのはやめろと、その場で乃愛は文句を言った。

しかし女生徒たちはやめなかったもので、最終的に乃愛は里親を募集して引き取ってもらったわけだが——彼女たちが怒り絡^{から}んできたところを、隆人が割って入ってくれたという経緯があった。

『ただのチャライエロ男かと思ったら、意外と根性ある。見直した』

『あのな……』

そんな感じで知り合い——後日、バイトを募集している父の喫茶店のチラシを渡した。

ろくに他人を認識できない乃愛だったが、初めてクラ

スメイトの名を覚えることができた。

それ以来、父は乃愛に同年代の友人ができたことをいたく感激し、隆人の時給を上げようとしたり、まかないを出したり、乃愛を店員として喫茶店に引きずり出そうとしたりいろいろし始めた。

そういう関係を、過ごしてきた。

そして最近、謎の病気にかかったわけだが、今さっき隆人が見舞いに来てくれるというメッセージが送られてから、何故か症状が悪化したような気がした。

なので『来るな』『帰れ』と言ったのだが――。

「あれ……？」

たった今、見舞いにきた隆人から、生徒会長と別れた話を聞いた直後、乃愛は自分の体が軽くなっていることに気づく。

「なんか、元気出てきたかも」
理由はわからなかった。

しかし、長い間苦しみの中にいた乃愛にとって、それは差し込んだ光のようだった。

「人の不幸話を聞いて元気出すとか……。お前、嫌われるぞ……。？」

「別に、嫌えばいい。わたしはなににも気にしない」
乃愛にとって、そのセリフは強がりではない。

幼いときからそういう信念の元に生きてきただけであ

る。

「それ置いといて、ありがと。遠慮えんりよなくもらおう」

と、隆人が持ってきたアイスやプリンをつかみ、もくもくと食べ始める。

ついさっきまで味覚も失われていたが、今は一際ひときわ鮮やかに甘みが感じられた。

「隆人の失恋話を聞きながら食べるスイーツは、おいしい」

「お前の初めての笑顔をこのタイミングで見ることになるのかよ！ もっと感動的な場面だろ普通！」

「上からお茶もってきて。わたし、ホットカフェオレ」
「聞いてねえし。人の話……！」

呆れつつも、隆人は立ち上がって地上一階へ向かう。
なんだかんだいって、病人や怪我人に優しいところがあるのである。

立ち直った乃愛は、その間にパジャマから部屋着へ着替えようとして、思い留まった。

（ちよつと待て。なにを考えてるの？ わたし）

それは、ちよつとした違和感だった。

男女どころか、自分以外の他者すらろくに認識しなかった乃愛の人生において、はつきりとは言語化できない感情だ。

「……？」

部屋の隅には、いつぞや父親が置いてくれた着替えが

仕舞われもせず置まれて置いてある。

目立たないようだったが、下着もまとめてなので、ちよつとみつともない。

「みつともないから着替えたい。そういうことだよね、きつと」

現実の事象に対して無頓着だと思われがちむとんちやくな乃愛だが、清潔感のある、乱れのない身だしなみにはこだわっている。

真面目とかいうわけではなく、決めたら己のルールを守るしょうぶんのが乃愛の性分である。

先ほどもでは起き上がるのも億劫おっくうだったので仕方なかったが、元気が湧いてきた今ならば、人と会う際に身支

度くらい整えるのが、自立した学生というものだろう。
しかも、パジャマを脱ぐと、寝汗で下着が透けかけて
いる。

が、それより先に机の上に置いてある鏡かがみを手に取り、
寝癖ねぐせを直そうとして、はっと気づいた。

「……なにしてるの、わたし？」

なにかがおかしい。と、乃愛は思う。

普段の自分がしていないことを、無意識のうちにしよ
うとしている。

そのとき、つけっぱなしにしていたPCモニタに映っ
ていたネットニュースの恋愛れんあいの項目に、ある単語が書か
れているのが目についた。

『恋愛問題』のコーナーにある、『恋煩い^{わづらひ}』という——
その項目の単語を目にしたとたん、乃愛はぴたりと固ま
った。

^{まが}真顔のまま、目を丸くして数秒後。

ちりちりと顔が焼け付くように熱さを帯び、白い煙が
上がっていく感覚に気づいた。

「おーい。ホットカフェオレ持ってきてやったぞ」
「ッ……!?」

ガチャリと地下室のドアが開いて、隆人が顔を出す。
その瞬間、先ほどから感じていた、乃愛の奇妙な感覚
が爆発した。



「――あ」

と、両手にマスターからもらった飲み物のカップを持っていた隆人が気づいたときには遅かった。

隆人は状況をひと目で理解。

立ち直った乃愛が、なんらかの要因でパジャマから私服に着替えようとした。

そこで、折悪しく^{おいあ}戻ってきた隆人と鉢合^{はちあ}わせてしまった。

状況を事細かに説明するなら、ただそれだけのことが――ノックを忘れてしまったのは、隆人の過失である。



問題は、既に事故は起きてしまったということである。飾り気のない黒の下着に包まれた白い肌が、脱ぎかけのパジャマ越しにしつかりと見えている。

いかに異性への意識が薄い乃愛であつても、これはシヨックに違いない。

隆人は驚きながらも、冷静に——しつかりとその姿を目に焼きつけつつ対策を講じる。

ここでのリアクションが、後々のダメージに反映されるのだ。

この難問に対し、とっさに隆人の脳内に思い浮かんだ選択肢は三つ。

① なにも見えない振りをしてごく自然に振る舞う。

ある意味失礼だと怒られそう。

② 下着姿をさわやかに褒め^ほめる。

↓
上から目線な

上にキモいと怒られそう。

③「ごめんと言つて素直に謝る」

↓
それで許される

つもりかと怒られそう。

（つて、全滅じゃねえか――）

セルフ突っ込みをしつつ、内心乃愛がどんなリアクシ
ョンを取るか考えながら、最悪の事態を想定して両手の
カップふたつを床ゆかに置いた、そのとき――。

「で……」

「で？」

「出てけ」

――――！！

A・怒られた。

「すみませんでしたっ！」

慌^{あわ}てて言われた通りにして、隆人は地上一階の喫茶店に戻る。

まあ、そうなるだろうな……。と、思いつつ、乃愛に元気が出たのはいいことだと、前向きに考えることにした。

（しかし、体が貧^{ひん}相^{そう}でも、エロく見えるもんだな。肌、白いし……。火^ほ照^てってるし）

などと言ったなら、刺されそうなので言わない。
書き置きだけ残して、ここは退散するのが正解といえ

よう。

「今度会ったら、ひとまず体調を気遣っておくか……」
結局、乃愛の病状がわからなかったが、それだけは伝えておいた方がいいだろう。

帰宅後。乃愛から隆人のところにきたメールには、『お見舞いのお礼は言う。ありがとう』と書かれており、隆人はホッとした。

『よかった。お大事にな』と、返信の文を打ち、送ろうとしたところで、追加のメッセージが届いた。

『それはそれとして、ころす』

「……」

返信のメールは、その後結局送ることはできなかつた。
なにも見なかつたことにしよう。

「試読版 乃愛編」はここまで。 続きは3月15日発売の本編でお楽しみ
ください。

※試読版に調整を加えておりますので、本編とは異なる点がございます。 あらかじめご了承ください。